

## 誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを育てる学級活動（１） ～ １年生における段階的な話し合い活動を通して～

### 要 約

近年の子どもたちを取り巻く環境の急速な変化を受けて、学習指導要領特別活動編においては、様々な集団での活動を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力が重視されている。そのために、学校や学級の課題を見出だし、よりよく解決するため、話し合っ合意形成し実践することの重要性が明確化された。そこで、小学校生活入門期である１年生において、これからの社会性の基盤を養うため、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを育てることをねらう本研究は意義がある。

発達段階が幼い１年生においては、学級活動（１）実践上、様々な課題があげられる。そこで、１年生の学級活動（１）において、題材の工夫と教師の支援に加え、子どもの発達段階や１年間の学級集団の高まりに応じて、１単位時間の話し合い活動の構成を段階的に変えていくことにした。そうすることで、「誰とでも仲よくするよさを味わう子ども」の育成をねらうとともに、１年生における学級活動（１）実践上の課題解決のモデルとしたい。

実践Ⅰでは、１学期にがんばったことをどのように発表するかを話し合い、「１学期がんばったね集会」に取り組んだ。

- （１） 頑張ったことの発表の方法を決める話し合い活動。
- （２） 友達と楽しく活動する集会活動。
- （３） グループ活動をしたり、友達の発表を聞いたりする振り返り活動。

実践Ⅱでは、友達とのかかわりをさらに深める活動にするために、「きらきらチャレンジをしよう」に取り組んだ。

- （１） １週間みんなで楽しく続けられるチャレンジの方法を決める話し合い活動。
- （２） みんなで楽しく記録にチャレンジする実践。
- （３） チャレンジを通して見つけた友達のよさを出し合う振り返り活動。

実践Ⅰ・Ⅱを通して、話し合い活動を段階的に取り組み、子どもたちの話し合いの質を高めていった。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- １年生の子どもの発達段階や１年間の学級集団の高まりに応じて、１単位時間の話し合い活動を段階的に変えていくことで、１年生における学級活動（１）の実践をスムーズに行うことができた。
- ①学級目標や学期の重点に合った題材、②実践しやすい題材、③友達との関わりが生まれやすい題材を選定し、子どもがクラスみんなで学級目標を活性化したいと思うように支援を行うことができた。
- 新学習指導要領に例示されているように、「１単位時間の前半に話し合っ合意形成し実践する」学級会のような１年生の発達段階に合った新しい話し合いの方法や題材の開発をしていく必要がある。
- 多数決による集団決定の前に、少数意見の子どもの思いを引き出す時間をつくり、よりよい合意形成を目指していく必要がある。

**キーワード** 学級活動 段階的な話し合い活動

## 1 主題設定の理由

### (1) 学習指導要領改訂の方向性から

特別活動は、様々な個性の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体である。その活動の範囲は、学年・学校段階に上がるにつれて広がりをもっていき、そこで育まれた資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくことになる。人間関係形成に必要な資質・能力は集団の中において、課題の発見から実践、振り返りなど特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。

そのスタートとなる1年生においては、学級内のいろいろな友達と、よりよい人間関係を築くことの心地よさを感じさせたい。これらのことから、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを育てることは意義深い。

### (2) 本学級の子どもの実態から

本学級の子ども達は明るく元気で活発である。保育園が同じ友達とは楽しそうに遊んでいる。一方で、新しい人間関係をつくることに抵抗があり、友達に進んで関わろうとはしない子もいる。また、集団遊びではルールを守らない行動の多さからトラブルになってしまうこともある。5月に行った実態調査アンケート(図1)からも、本学級の子どもたちの人間関係が固定化している傾向が読み取れる。これらのことから、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを目指す本研究は意義深い。

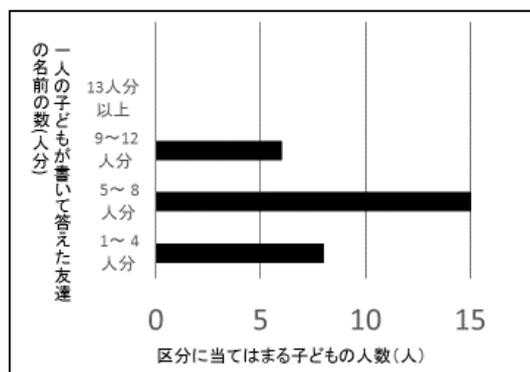


図1 子どもへのアンケート調査結果(5月)

質問項目  
「仲よく遊んでいる友達の名前を書きましょう。」

※学級の人数…29人

### (3) これまでの学級活動実践の課題から

1年生において学級活動内容(1)の実践をするにあたって、これまでに1年生の担任を経験したことがある先生方に聞き取りを行った。聞き取りの項目は、「1年生で学級活動を行うことについてどう思うか。」「学級活動にどのように取り組んでいたか。」である。すると、学級活動の実践に関して、図2のような声が上がった。これらはつまり、発達段階に合わせた話合いの仕方が分からないから第1学年での学級活動(1)の実践に抵抗を感じやすく、実際の教育現場において十分に取り組めていない現状を表していると考えられる。

- ・1年生に話合いをさせるのは難しいと思う。話し合えない。
- ・教師が決めた方が早い。
- ・1年生でもできる話合いのさせ方が分からない。
- ・いつもけんかになってしまい、教師が決めてしまう。
- ・十分に取り組めていない。

図2 1年生を担当した経験がある先生方の声

そこで、本研究では1学期、2学期、3学期で少しずつ内容を増やし、1年生でよりスムーズに学級活動(1)を実践できるモデルとするため、話合い活動を段階的に位置付けていくことにした。

## 2 主題の意味

### (1) 主題「誰とでも仲よくするよさを味わう子ども」について

友だちとの関係をよくする楽しさを体験し、いろいろな友だちと進んでかかわる子ども

本研究では図3のように、めざす子どもの姿を段階的にとらえる。小学校入学当初の子どもたちは、幼児期の自己中心性がかなり残っており、学校の中の児童相互の関係は、個々の児童の集合の段階にある。さらには、言ってよいことと悪いことについての理解はできるようになるが、感情的、衝動的な言動が多く友達とのトラブルに発展することもある。そのような発達段階から、友達との関わりを通して身に付けた力を生かし、小学校における生活や人間関係に適應できるようにすることを目指していく。

小学校生活を送っていくと、話し合い活動や集会活動を通して、友達と関わる機会が増え、次第に仲よくすることの楽しさを感じることができるようになる。グループで活動する子どもが見られるようになってくる段階である。この段階で友達と仲よくする楽しさを多く体験させておくことが大切であると考えられる。

第1学年後半になると、教師を中心とする学級への所属感や一体感があらわれ始める。この時期になると、子ども達は、友達と仲よくする楽しさを知っている。そのため、グループで活動する子どもが多く見られるようになってきたり、他者の気持ちや感情を理解しようとする子どもが表れ始めたりする。そして、

そのような子ども同士のかかわりや、友達と仲よくする楽しさを知った集団の中での活動を通して、「もっといろいろな友だちと仲よくなりたい」という気持ちが大きくなっていく。すると、友だちと仲よくすることに価値を見出し、進んで友達とかかわるようになっていく。本研究では、このような子どもの姿をめざす。

このように、1年生において、友達と一緒に活動する楽しさを体感させておくことが、これからさらに学級全体に目を向けたり、人間関係を少しずつ広げていったりする子どもを育てることにつながっていくと考えられる。

### (2) 副主題「1年生における段階的な話し合い活動」について

友だちとの関係をよくしようと進んで関わる子どもを育てるために、話し合い活動の1単位時間の構成を少しずつ変えていくこと

低学年では、教師の助言を受けながら発表の仕方や意見の聞き方など基本的な話し合いの進め方を身に付けることができるように配慮することが大切である。とはいえ、学校

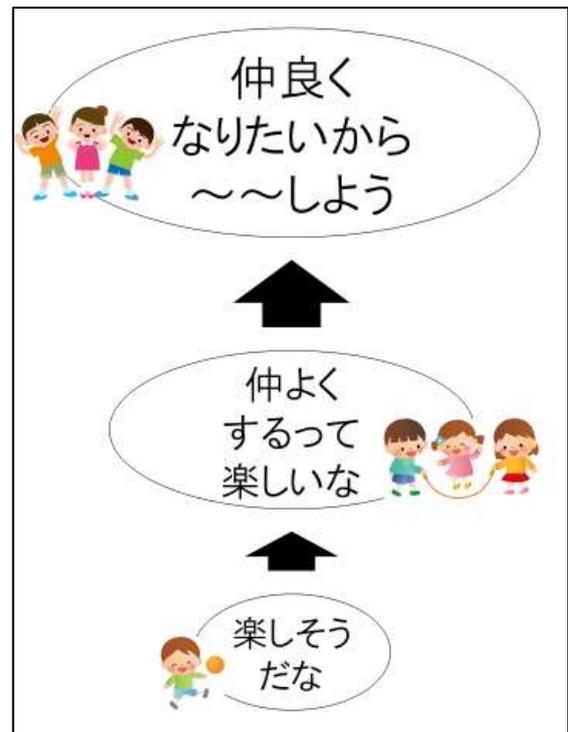


図3 具体的な子どもの姿（声）

そのものへの適応にとまどう子どもが多い入学当初においては、教師が話し合いの司会や記録の役割を受けもち、話し合いの進め方を実際に見て理解できるようにすることを大切にしたい。そこで、本研究では、1学期、2学期、3学期に分けて、図4のような段階と構成で話し合い活動を位置づけ、スモールステップで1年生に話し合い活動の経験を積ませ、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを育てたい。

1学期は、幼児期の自己中心性が残っており、個々の児童の集合の段階の子ども達である。そこで、まずは子ども達同士のかかわりを多く生むことをねらって、考えを出し合う話し合い活動に重点を置いて指導する。「私は〇〇に賛成です。理由は～～だからです。」という発言の仕方をもとに、全員発言の場を設ける。このことは、自分の考えを伝えるとともに、友達の考えを聞く場にもなり、子ども達同士のかかわりを生むきっかけとなる。この段階では、集団決定の仕方については主に多数決で行い、決まったことをみんなで実践する経験を積ませることを重視する。

2学期は、友だちとかかわる機会が増え、個々の集合からグループ活動への関心が高まっていく段階の子ども達である。そこで、友だちと仲よくすることに価値を見出させたい。そのために、考えを比べる話し合い活動を位置づけ、「どちらの考えの方が、友だちと仲よくなれるか？」という比較をさせていく。考えを比べやすくするために、必要に応じて原案を試す活動を位置づける。そうすることで、友だちと仲よくなれそうか、話し合いたくなる。このことが、合意形成しようとする子ども達を育てていくことにつながっていく。

3学期は、いろいろな友だちとかかわる経験を積み重ね、学級への所属感や一体感が高まってくる段階の子ども達である。そこで、お互いの考えを聞き合って、よりよい合意形成をしようとする子どもを育てるために、考えを比べる話し合い活動に、小グループで話し合う形態を位置づける。小グループで「どちらの考えの方が、友だちと仲よくなれるか？」を話し合わせることにより、子ども1人あたりの発言回数が増えたり、自分の考えが言いやすくなったりし、意見が活発に行き交うようになる。そして、「私は、好きだから、これがしたい。」という自己中心的な段階から、「私のクラスには、こんな考えの友達がいるから、今回は、この考えの方がよさそうだな。」という、集団の一員として考える段階へと成長することが期待できる。

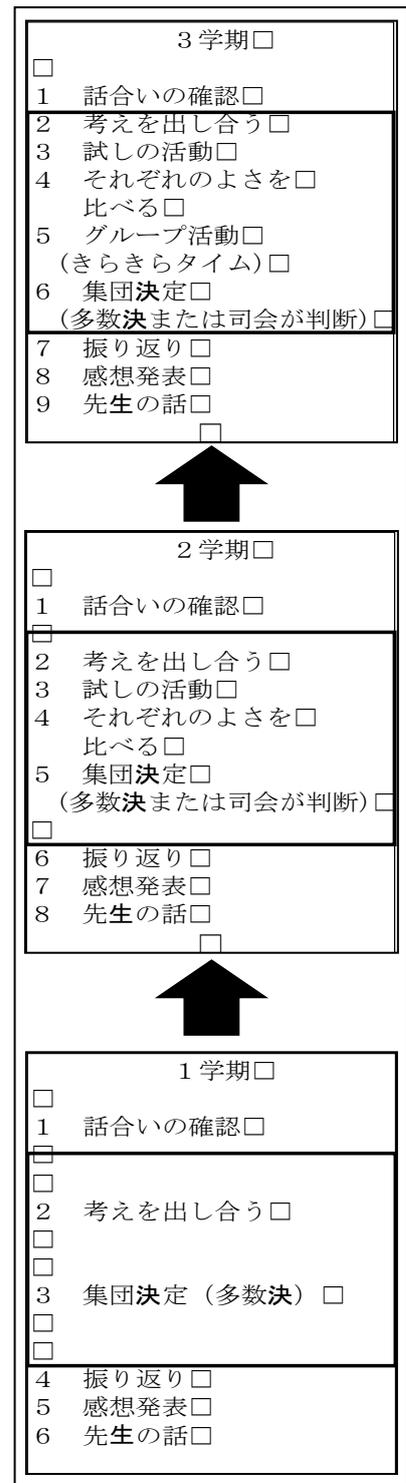


図4 1年生における段階的な話し合い活動

### 3 研究の目標

1年生における段階的な話し合い活動を位置づけた学級活動(1)の実践を通して、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもを育てる。

### 4 研究の仮説

1年生の学級活動(1)において、題材の工夫と教師の支援に加え、子どもの発達段階が1年間の学級集団の高まりに応じて、1単位時間の話し合い活動の構成を段階的に工夫すれば、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもが育つであろう。

### 5 研究の内容と方法

本仮説に迫るために、以下のような具体的方策に取り組んでいく。

#### (1) 題材の工夫

題材は、教師が学級集団育成上の段階を意図して、学級目標や学期の重点に合わせて選定する。第1学年の発達段階をふまえて、決定後にすぐ実践できるものや、実践の中に友達とかかわる楽しさが生まれやすいものが望ましい。題材選定を実際に進める際には、子どもの話や作文の中から教師が子どもの思いや願いを引き出すことで、子どもに発見させるようにする。

本研究では、図5の①～③の視点で題材を選定する。

#### (2) 教師の支援

第1学年においては、話し合い活動も実践もはじめは教師が主導してモデルを示すことが大切な支援となる。そうして、題材全体の流れを経験させながら、子どもが役割を担う部分を少しずつ増やしていく。

本研究では、図6のような支援を考えている。

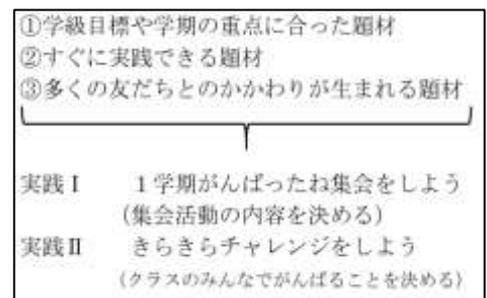
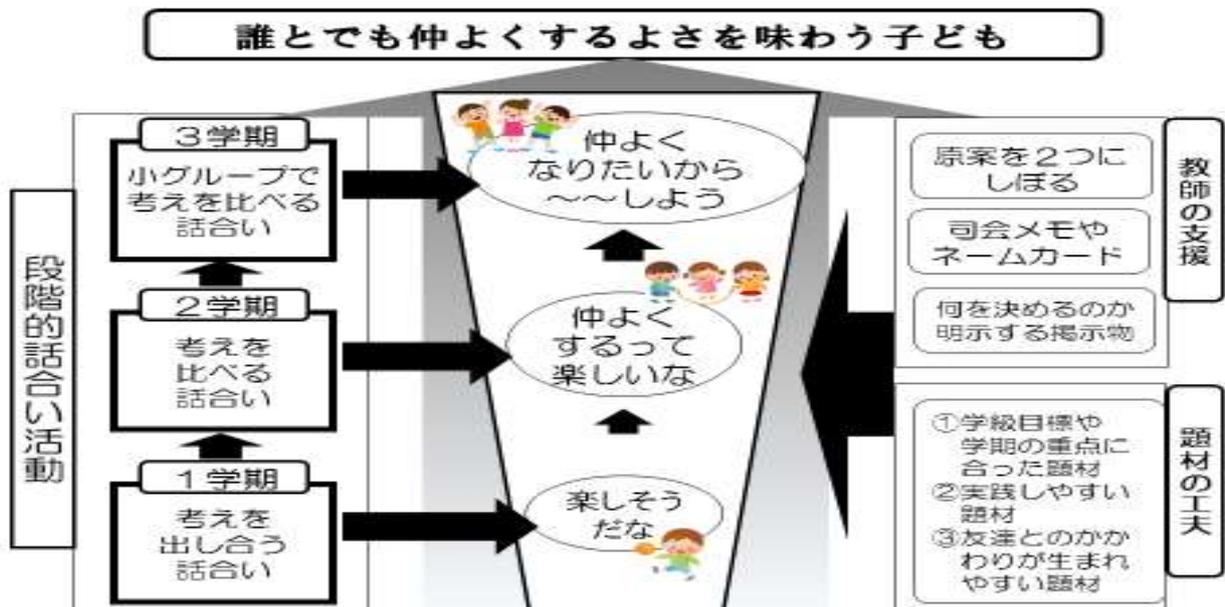


図5 本研究の題材の工夫と題材の例

課題発見	話し合い活動	実践・振り返り
原案を2つに絞る	司会メモ ネームカード タイマー 試しの活動	何を決めるのか明確にする掲示物 (集会のプログラム等)
教師のモデルにならない実践する		

図6 教師の支援

### 6 研究構想図



## 7 研究の実際

### (1) 実践事例Ⅰ「1学期がんばったね集会をしよう」(7月) 実際と考察

#### ① 事前の活動

入学したばかりの子ども達は、同じ幼稚園、保育園だった友達と遊んでいることが多く、人間関係を広げることができていなかった。また、休み時間などは一人で過ごしている子もいた。そこで、1学期にがんばったことを発表する集会を開き一人一人ががんばったことを発表することで、学級みんなに自分のことを知ってもらえるように「1学期がんばったね集会」を開くことにした。この集会の提案は教師が進め、モデルを示しながら行なった。子どもたちは、自分が発表したいことをたくさん出し合っていて、クラスみんなで集会をすることに大変意欲的だった。

#### ② 学級会「1学期がんばったね集会で発表する内容を決めよう」

原案 A：グループで劇で発表 B：1人1人が自分で発表

1学期は、子ども達同士のかかわりを多く生むことをねらって、全ての子ども達が自分の考えを発表できるようにした。その際板書には、クラス全員のネームカードを貼り出し、全員が発表したことを視覚的に捉えることができるようにした。(図7)

今回の話し合いでは、「1学期がんばったね集会」で発表する方法として、がんばったことをグループで劇をする方がいいか、一人ずつ発表する方がいいかの2択で話し合いを行なった。

話し合いでは、子ども達はそれぞれにどちらの案がいいと思うか、理由とともに発表していった。この話し合い活動での子どもたちの発言の流れを図7にまとめた。子どもたちの発言の中には、下線部のように「みんなと」や「一緒にできる。」「友達が笑ってくれる。」などと「友達と関わりたい。」「友達と劇をしたら楽しいだろうな。」と思いを膨らませながら話し合いの中で自分の考えを発表している子どもがたくさんいた。しかし、「劇が楽しいから。」や「一人でするのは恥ずかしいから。」と友達と仲良くするという目的を考えずに発言している子もいた。

次に、集団決定の時間を設定した。黒板に貼ったネームカードからも視覚的にどちらが多いかを比べることができるが、多数決の方法で集団決定をした。

このように、クラス全員の子どもたちが自分

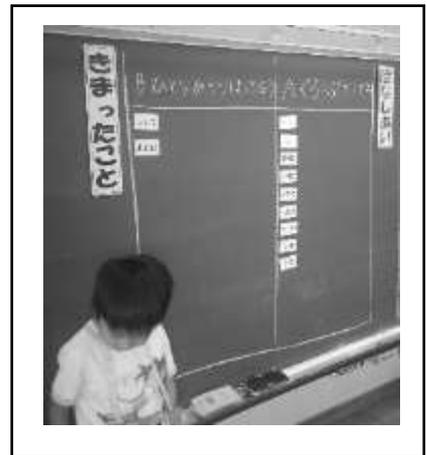


図7 ネームカードを用いた板書

(司会):今から話し合いを始めます。Aのグループで劇をするのがいいか、Bの一人一人発表するのがいいか、自分の考えを発表してください。  
(児1):班の人と一緒にできるから、Aがいいです。  
(児2):グループで劇をしたら、お友達が笑ってくれるからAがいいです。  
(児3):グループで劇をすると楽しいからAがいいです。  
(児4):一人で発表すると恥ずかしいからAがいいです。  
(児5):頑張ったことがわかるからBがいいです。  
(児6):みんなとお話できるからAがいいです。  
(児7):みんなが楽しくできるからAがいいです。  
(児8):一人でするのは寂しいからAがいいです。  
(司会):全員が考えを発表したので多数決で決めていいですか。  
最後は、多数決でAのグループで劇をすることに集団決定をした。

図8 話し合いの流れ(抜粋)

の考えを発表することで、友達と仲よく集会をすることへの意欲を持たせることができた。また、友だちの考えを聞き、ネームカードで視覚化したことで、友達の考えを知ることができた。子どもたちの発言の中にあつた、「みんなと」や「一緒に」という言葉は、友達と仲よくすることを意識した発言であり、めざす姿であると考えられる。

### ③ 実践・振り返り活動

実践に向けて、1学期に頑張ったことを振り返る時間を設定した。子どもたちからは、「運動会のダンス」や「国語や算数の勉強」、「給食」、「プール」などが挙げられた。その中から劇で発表したいことを班ごとに決め、練習を行った。

発表する内容が決まると、子ども達は、どんな劇にするか進んで話し合いながら準備をしていた。先生役と子どもたち役に別れたり、自分たちでセリフを考えたりして練習して行った。自分の思い通りにならずにすねている友達がいると、同じ班の子がその子の言うことに耳を傾けたり、説得したりしている姿も見られた。

「1学期がんばったね集会」(図9)では、全員の班が劇を発表することができた。会の感想発表では、「クラスの友達が面白い劇をしていたので、とても楽しかった。」や「〇班の発表で、1学期のことを思い出することができた。」など、子どもたちが1学期を振り返ることができ、友達と仲よくすることの良さを感じていた。

図10は、集会が終わった後に取ったアンケートを集計したものである。質問に対して◎と答えていた子どもたちがほとんどだった。これは、学級会での発言の機会があったり、劇を作って発表する過程で、友だちとたくさん話したり、友だちと仲よくする経験が多くできたからだと考えられる。また、学級会で発表の方法を決めてから、すぐに発表の準備にとりかかれたことも、かかわりを多く生むことに寄与したとかがえる。

学級会の時は、A案の立場だった子どもも、集会をやってみての振り返りでは、◎の評価をしていた。自分の思い通りにならなくても、友達と仲よくすることに価値を見出している姿である。

一方で、△という評価をしている子どももいた。人前に立つことが苦手な子どもにとっては、友達と仲よくする楽しさをより多く体感させていき、安心できる人間関係を作っていく必要があると考えた。



図9 がんばったね集会の様子

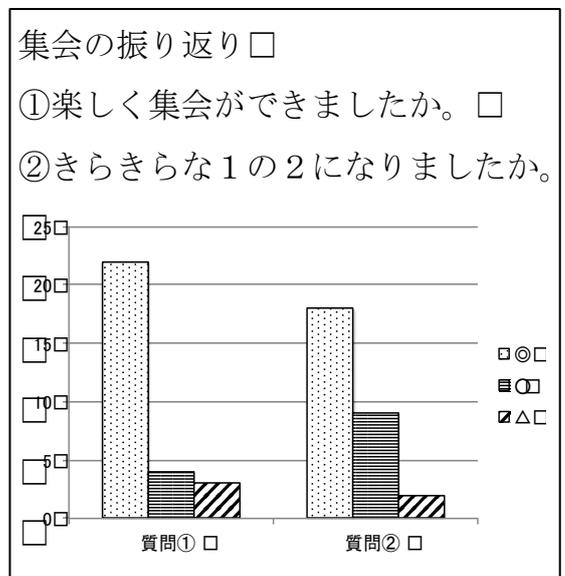


図10 集会の振り返り集計結果

## (2) 実践事例Ⅱ「きらきらチャレンジをしよう」(12月) 実際と考察

### ① 事前の活動

2学期に入ると、週1回のクラス遊びの実践を積み重ね、友達と仲よく遊ぶ姿が増えてきた。そこで、さらにクラスの友達と仲よくなれるように、1つのことにクラス全員でチャレンジしてはどうかと考え、「きらきらチャレンジをしよう」を担任から提案した。「きらきらチャレンジ」とは、クラスみんなで1週間毎日1つのことにチャレンジして記録に挑戦するものである。チャレンジの内容はA：ドッジボールラリー、B：おおなわの2つにした。子どもたちは、チャレンジすることに意欲的で、話合う前から楽しみにしていた。

### ② 学級会「きらきらチャレンジの内容を決めよう」

原案 A：おおなわ B：ドッジボールラリー

2学期は、友だちと仲よくすることに価値を見出させるために、2つの案を比べる話し合い活動を位置づけた。実際の話し合いの流れを図11に示す。子ども達がA・Bどちらの方が友達と仲よくなれるかを比べて判断するには、実際にやってみる必要があると考えた。そこで、学級会の途中に試しの活動を設定した。(図11および図12) 試しの活動の前には、再度話し合いのめあてを確認し、より仲よくなれるのはどちらの案かを、子ども達が判断しやすくなるようにした。

試しの活動後の交流の時間では、子どもたちの発言が、よりめあてを意識した具体的なものとなっていた。図11の下線部にあるように、試しの活動を通して考えが変わったり、さらに思いが強くなったりした子どももいた。話し合いは、最終的には多数決を取り、A：19人、B：4人でAに決定した。

話し合いの振り返りでは、Bに賛成していた子も「Aに決まったから頑張ろうと思いました。」と感想を書いていた。決まったことを受け入れてがんばろうとする、友だちと仲よくしようとする子どもの姿があった。

教師の話では、少数派の意見だった子のそのような感想を取り上げ、友達と仲よくしようとする姿が学級目標に重なると価値づけた。

2つの意見を比べる話し合い活動を仕組んだことと、試しの活動を位置づけたことで、子ども達は、「どちらの方が仲よくなれるか」を判断しながら参加できた。

(司会):今から話し合いを始めます。Aのおおなわをするの  
がいいか、Bのドッジボールラリーがいいか、自分  
の考えを発表してください。□  
(児1):私は、Aのおおなわがいいです。わけは、ひっ□  
かかかってもいいからです。□  
(児2):ぼくは、Bのドッジボールラリーがいいです。□  
わけは、キャッチボールがたのしいからです。□  
(児3):私はAがいいです。けがをしている人がいるから□  
です。□  
~試しの活動~□  
(児4):ぼくは、BからAにかわりました。やってみて、□  
回数がどんどん増えて行くのが楽しいからです。□  
みんなで40回とびたいです。□  
(児5):どちらもやってみてやっぱりAがいいです。わけ  
は、数がふえるからです。□  
(児6):私はBに変えました。やってみて、ボールを投げ□  
たのが楽しかったからです。□  
(児7):ぼくはAの大縄がいいです。Bは、ボールが顔と  
かに当たって痛そうだったからです。□  
(司会):Bの意見が少ないようですが、Bがいい人は意見を  
言ってください。□  
(児8):ぼくは、Bがやっぱりいいです。ボールを投げる  
のが好きだからです。□  
□  
(司会):考えを発表したので多数決で決めていいですか。□  
最後は、多数決でAのおおなわに集団決定をした。□

図11 話し合いの流れ(抜粋)



図12 試しの活動の様子

### ③実践・振り返りの活動

話合いがあった翌週から1週間「きらきらチャレンジ」として大縄とびを行った。(図13)子どもたちは「みんなが揃うまで練習していいですか?」という子がいて、何人も友達を誘って練習していた。話合いの時に「みんなで40回とびたい」と発表した子がおり、40回をクラスの目標にして、子どもたちは取り組んでいた。チャレンジ初日は37回と、目標には届かなかった。子どもたちは残



図13 きらきらチャレンジの様子

念そうにしていたが、「明日は頑張るぞ。」と意気込んでいる子もいた。最後の日には、目標の40回を大きく超え60回とぶことができた。チャレンジ中は、友達と一緒に声を出して数を数える子どもたちが増えていき、60回とべた時には友達と一緒に大喜びする子どもの姿があった。

チャレンジ後の振り返りでは、図14にあるように、20人以上の子が楽しくチャレンジすることができた。「40回を目標にしたい。」と言った子は、「ぼくが提案したことができたのでうれしかったです。」と感想に書いていた。他の子どもたち

の感想にも、「60回を超えたのでうれしかった。」や「目標の40回を超えたからうれしかったです。」など、みんなで目標を達成できたことを喜ぶ記述が多く見られた。中には、「みんなでチャレンジして楽しかった。」のように友達と仲よくするよさを感じていることを直接書いている子どもの姿もあった。

下線部アのようになったのは、1学期から取り組んできた集会活動やクラス遊びの積み重ねを通して、「学級のみんなと仲よくしたい。」「学級みんなで楽しいことをしたい。」と思う子が増えたからだと考える。

また、下線部イの子どもは、学級会で「友達と一緒に40回とびたい。」と発言し、その達成を目指して友達とかわり続け、達成できて喜びを感じている。このような子どもこそ、友達との関係をよくする楽しさを体験し、いろんな友達と進んでかわろうとする「誰とでも仲よくするよさを味わう子ども」の姿である。

#### 集会の振り返り

- ①楽しくチャレンジができましたか。
- ②友達と仲良くなりましたか。
- ③きらきらな1の2になりましたか。

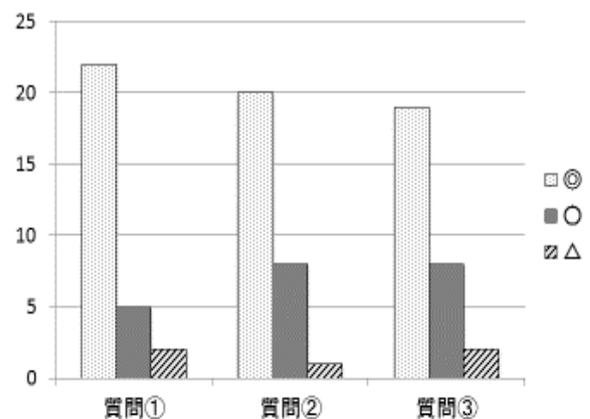


図14 集会の振り返り集計結果

## 9 成果と課題

### (1) 全体考察

実践Ⅱの後(12月)に、5月の実態調査アンケートと同じ調査を行った。結果は、図15のようになった。5月(図1)と12月(図15)を比べると、子ども達が、仲よくできていると感じている友達の数が大きく増えていることが分かる。

また、図16は、本学級にかかわりのある先生方や保護者の子ども達に関する事である。

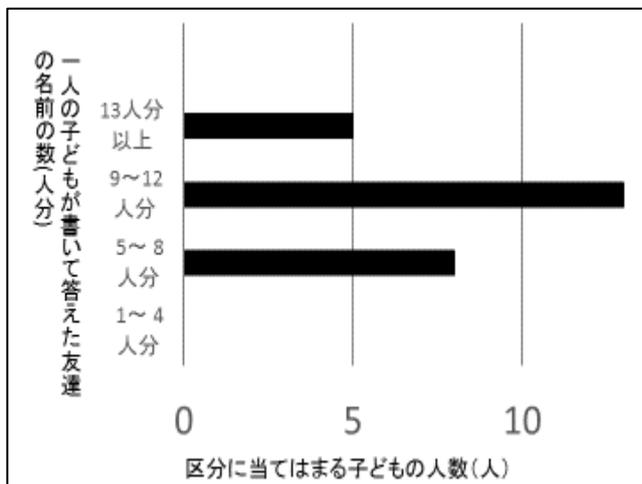


図15 子どもへのアンケート調査結果(12月)  
質問項目  
「仲よく遊んでいる友達の名前を書きましょう。」  
※学級の人数…29人

- ・いろいろな人を誘って休み時間に大勢で遊んでいる。
- ・放課後に公園で遊ぶ約束をしたと行って遊んでいた。
- ・特性をもったA君が、クラス遊びに入れていて、うれしく思う。
- ・同じ保育園の子が居なくて友達ができるか心配だったけど、たくさん友達の名前が家で出てくるので安心した。

図16 本学級の子ども達に関する関係者の声

これらのように、誰とでも仲よくするよさを味わう子どもが育ったのは、子どもの発達段階や学級集団の高まりに応じた話し合い活動を仕組み、学級活動の実践を積み重ねてきたからであると考えられる。

### (2) 研究の成果と課題

- 1年生の子どもの発達段階や1年間の学級集団の高まりに応じて、1単位時間の話し合い活動を段階的に変えていくことで、1年生における学級活動(1)の実践をスムーズに行うことができた。
- ①学級目標や学期の重点に合った題材、②実践しやすい題材、③友達との関わりが生まれやすい題材を選定し、子どもがクラスみんなで学級目標を活性化したいと思うように支援を行うことができた。
- 新学習指導要領に例示されているように、「1単位時間の前半に話し合ってから後半に実践する」学級会のような1年生の発達段階に合った新しい話し合いの方法や題材の開発をしていく必要がある。
- 多数決による集団決定の前に、少数意見の子どもの思いを引き出す時間をつくり、よりよい合意形成を目指していく必要がある。

### 〈参考文献〉

- ・ 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」
- ・ 国立教育政策研究所 「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」